02

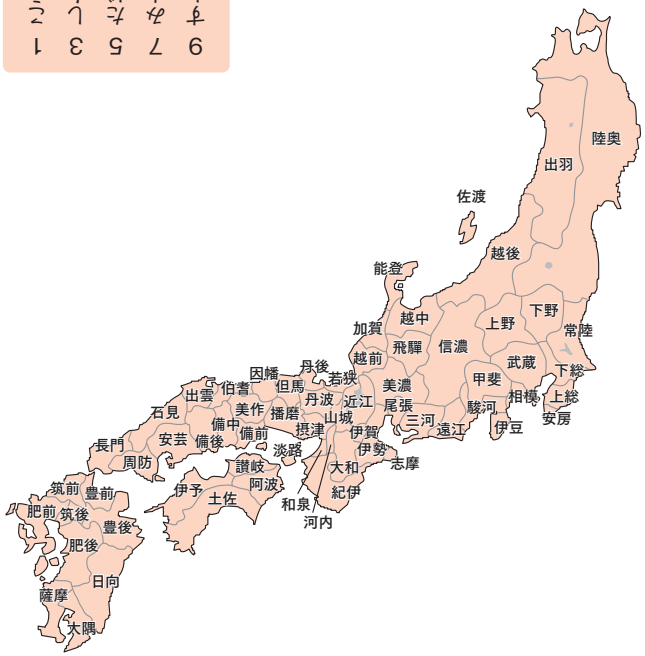
NAZOTOKI

旧国名の近江（滋賀県）を「おうみ」、大和（奈良県）を「やまと」と読むのはなぜ？

謎解きの前に、ちょっと問題を。次の旧国名をあなたは正しく読めますか？

1 上野　2 下野
3 下総　4 遠江
5 但馬　6 伯耆
7 美作　8 石見
9 周防　10 日向

1 こうずけ（群馬）　2 しもつけ（栃木）
3 しもうさ（千葉）　4 とおとうみ（静岡）
5 たじま（兵庫）　6 ほうき（鳥取）
7 みまさか（岡山）　8 いわみ（島根）
9 すおう（山口）　10 ひゅうが（宮崎）



津・軽・海・峡、能・登・半・島、近・江・盆・地などの地名、讃・岐・うどん、飛・騨・牛などの地方の名産、他にも阿・波・踊りや土・佐・犬に戦・艦・大・和、サザンオールスターズと言えば湘・南の海がイメージされるが、湘南とは相・模・南部、甲・州・ワインの甲州とは甲・斐のことである。明治の廃藩置県から1世紀半が経ったが、旧国名は今も我々の周囲の様々な場面で生きている。

しかし、これらの旧国名、近江や大和なら多くの人は難なく読めるだろうが、右ページの例題の上野や美作を、はたしてどれくらいの人が正しく読むことができるだろうか。そもそも、なぜ上野を「こうずけ」、近江を「おうみ」、大和を「やまと」と読むのだろうか。なぜ、漢字の音と実際の読み方が一致しないのだろうか。

これらの国名の起源はおよそ1400年前まで遡る。大化の改新ののち、朝廷から各地に国司が派遣されるようになり、令制国と呼ばれる行政区分が整ってゆくが、初期の国名は、自然などその地域の特徴に由来したものが多かった。火山活動が活発な「火の国（熊本県）」、森林が広がる「木の国（和歌山県）」、三つの川がある「みかわ（愛知県）」、島が多い「しま（三重県）」、泉が湧き出る「いずみ（大阪府）」、沖にある島の「おき（島根県）」などである。「きび（岡山県）」や「けの（北関東）」はその地方を支配した豪族の名が由来だ。

ところが、奈良時代に入ると、地名はすべて縁起のよい漢字2文字にせよという『好字二字化令』が発布される。唐の制度を真似た法令だが、「火の国」は「肥前」と「肥後」に二分され、2文字にするために、本来は漢字1文字の「島」を「志摩」、「沖」を「隠岐」、「木

31 日本の海岸に松原が多く見られる謎

NAZOTOKI

世界遺産三保の松原（静岡市）

日本三景天橋立（京都府宮津市）

「**白砂青松**（はくしせいしょう）」という言葉がある。これは、白い砂浜と青々とした松林が続く日本特有の美しい海岸風景を形容した言葉であり、三保の松原や虹ノ松原など「〇〇の松原」と呼ばれる景勝地が全国各地に見られる。日本三景として知られる松島、天橋立、厳島も古くより和歌にも詠まれた白砂青松の名勝だ。なぜ、日本の海岸にはこれほど松林が多いのだろうか？

松は、古くより日本の海岸に自生している。しかし、現在、各地に広く見られる松林の多くは自然林ではなく、防砂、防風、防潮などのために江戸時代以降に植林された人工林であり、松といってもそのほとんどは**クロマツ**である。クロマツは、耐塩性に優れ、松葉は細いため、風に逆らわず、風の力を弱め、風に乗った砂を地面に落とす働きが大きい。また、砂浜のように保水性や栄養分に乏しいところでは、普通の樹木は育ちにくいが、クロマツは地下水位まで深く太い根を伸ばし、砂地でもよく育つ。潮風にさらされる砂浜海岸に植栽する樹木としてクロマツは最適なのだ。さらに、２０１１（平成23）年の東日本大震災の大津波では、破壊された松林が多かったが、一方では、松林が津波の勢いを軽減し、被害を軽くした地区もあった。今、クロマツの海岸林が持つ津波に対する減災機能が見直されている。

懸念されることもある。それは、先人たちは、集落や田畑を潮風や飛砂から守る松林を大事にし、樹木の下刈りや間伐、下地の除草や松葉かきなどを怠らなかったが、近年はそのような人手を要する作業をあまりしなくなったことだ。そのため、松林が藪化してしまったり、マツクイムシの被害が増えたりし、各地の白砂青松が危機に面している。対策が急がれる。

47

NAZOTOKI

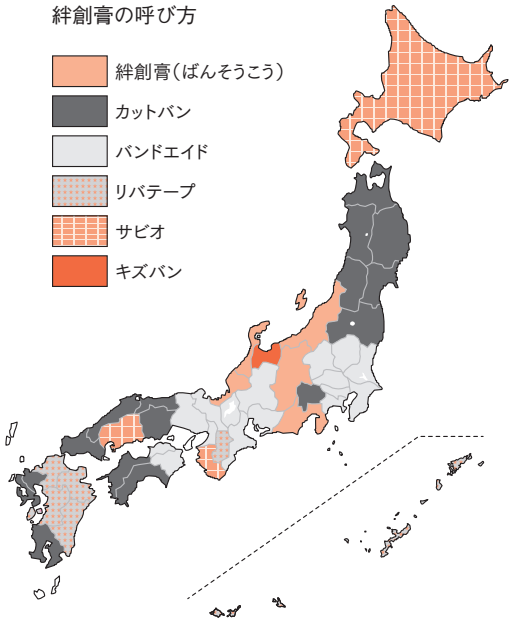
絆創膏

バンドエイド、カットバン、リバテープ、サビオ、キズバン、絆創膏の呼び名が各地で違うのはなぜ？

家庭の救急箱の必須品であり、女性がハンドバッグに入れる定番アイテムの一つでもあるのが絆創膏である。しかし、この絆創膏、一般名称である「バンソウコウ」とは全国的にあまり呼ばれていない。関東や関西を中心にもっとも多くの人が使っている呼び名は「**バンドエイド**」だ。バンドエイドはアメリカ系の多国籍企業であるジョンソン・エンド・ジョンソンの商品名で、絆創膏の国内シェアは40％に達する。絆創膏を商品名の「バンドエイド」と呼ぶ人が多いのは、本来はニチバンのセロハンテープの商品名である「セロテープ」や、三洋電機のデジタルカメラの登録商標である「デジカメ」という呼称を、多くの人が一般名称のように使っているのと同じである。

絆創膏をそのまま普通に「バンソウコウ」と呼んでいる地域もあるが、東北や中国地方、九州西部では「**カットバン**」、一部地域を除く九州と奈良県では「**リバテープ**」、北海道、和歌山県、広島県では「**サビオ**」、富山県では「**キズバン**」と、地域によって様々な呼ばれ方がされている。

それらの呼称もやはり商品名だ。「カットバン」は佐賀県に本社がある祐徳薬品の商品で、もちろん地元でのシェアは最大だ。「リバテープ」は同じ九州の熊本県のリバテープ製薬が



製造しており、熊本を中心とする九州で広く販売されている。奈良県でもリバテープと呼ばれているが、熊本のリバテープとは別会社の奈良県内の共立薬品の商品「キズリバテープ」を略した呼称だ。「**サビオ**」はもともとはスウェーデンのセデロース社のブランドで、日本ではニチバンやライオンがライセンス契約を結んで販売し、北海道でシェア1位になるなど、かつては全国的にもかなり売れ行きがあった。しかし、２００２年に製造中止となり、商品名だけが一般名称として残っている。「**キズバン**」と呼ぶのは全国で富山県だけだ。この商品の製造元のライトは富山県内の企業ではないが、富山県内のゴルフ場でキズバンを販売したことから富山県にその呼び名が広まった。

これらは一種の方言と言ってもよいだろう。ただ、それらが自分の住む地方だけの言葉で、実は他地方では誰も使っていない言葉だと知らず、共通語だと信じ切っている人が多い。前項の模造紙の場合もそうだが、地元では誰も気付かず、進学や就職で他地方で暮らすことになった人が、初めて方言であることに気付くという。日本は狭いようで広い。

63

NAZOTOKI

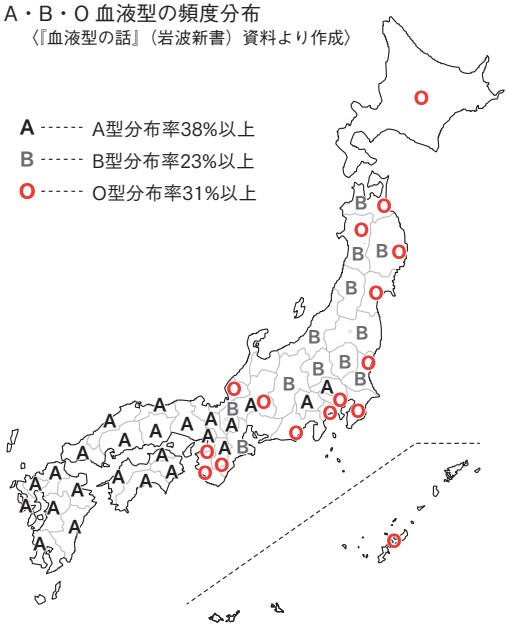
日本人の血液型の比率が地方により異なるのはなぜ？

日本人の血液型A・O・B・ABの比率はおよそ4対3対2対1だそうだ。しかし、その比率は全国一律ではなく地域差がある。A型は西へ行くほど比率が高く、逆にB型は西日本より東日本で比率が高い。日本人は、南アジア系のO型やB型の古モンゴロイドと北アジア系のA型の新モンゴロイドと呼ばれる人々の混血によって形成されたという説が有力だが、実は彼らが日本へやって来た経路にこそ、血液型比率に地域差が生じた原因がある。

日本列島に最初にやってきたのは**O型の古モンゴロイド**である。彼らはまだ日本列島が大陸と陸続きだった3～4万年前頃、黒潮に乗り、あるいは海岸沿いに日本の太平洋岸にたどり着いた。O型は現在でも太平洋岸の地方で比率が高い。そして、原因は明らかではないが、ユーラシア大陸を北上した別の古モンゴロイドの血液型が突然変異によってB型になるという現象が生じ、約1万4000年前、その**B型の古モンゴロイド**が、北から樺太を経由して日本列島にやってきた。彼らがいわば原日本人と言うべき人たちで、やがて縄文文化を創成し、**縄文人**となったと言われている。

6000年前頃になると、古モンゴロイドとは異なる身体的特徴を持った**A型の新モンゴロイド**が中国北部から朝鮮半島を経て北九州に上陸する。ただ、縄文人の生活圏は東日本が

A・B・O血液型の頻度分布
〈『血液型の話』（岩波新書）資料より作成〉



中心であり、このときはまだ先住の縄文人と移住してきた人々との間に接触や摩擦は少なかったと思われる。しかし、その後もA型の新モンゴロイドは、次々と渡来し、O型・B型の縄文人を次第に北へ追いやり、混血を進め、居住範囲を広げ、弥生文化を創成する。**弥生人**である。A型は西日本では圧倒的に分布率が高いが、東日本にも広く分布しているのはそのためであろう。なお、日本人のルーツついてはまだ研究段階で不明の部分も多く、他にも様々な説がある。

ところで、日本人にはA型の人は几帳面だとか、O型は大雑把でいい加減だとか、血液型で性格を判断したり、血液型占いや血液型相性診断に一喜一憂したりする人が多い。それらには科学的な根拠はまったくなく、そんなことを気にするのは、そもそも世界中で日本人だけだ。海外からは、日本人の奇妙な風習と不思議に思われているという。学校や職場などで、血液型によって性格を決めつけたり、能力や仕事ぶりを判断したりするのは「ブラッドタイプハラスメント」になるので、気をつけよう。